第一章　光る源氏十七歳夏の物語

［第一段　空蝉の物語］

（しかし源氏は）寝られたまはぬ（お眠りに為れない）ままには（で居らして）、「我は、かく人に憎まれても成らはぬ（ならはぬ、いなかったもの）を、今宵なむ（なむ、こそ）、初めて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくて、ながらふ（永らう、生き続ける）まじう（べきではない）こそ（とまで）、思ひ成りぬれ（なりぬれ、知らされた）」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり。

（また小君を見て）いと労たし（らうたし、庇ってやりたい）と思す。手さぐりの、細く小さきほど、髪のいと長からざりし（髪が然程長くなく）気這ひの様（けはひのさま、している形が）通ひたる（かよひたる、姉の女君に似ているところ）も、思ひなし（思い遣って）にや（みれば）あはれなり（懐かしい）。（今、女君に）あながちに（強ちに）かかづらひ（掛か連らひ）たどり寄らむも、人悪ろ（人目に悪い）かるべく（だろうし）、まめやかに（本当に）めざましと（忌々しいと）思し明かしつつ（思いながら夜を明かして）、例のやうにも（れいのようにも、前夜までのように）のたまひ（文の御用を小君に御命じ）まつはさず（為さることは無かった）。夜深う（朝の暗い内から）出でたまへば（帰途に着かれたので）、この子は（小君は源氏が）、いと（とても）いとほしく（気の毒で）、さうざうしと（この日の事を収まりの悪いことと）思ふ。

女も、並々ならず傍痛し（かたはらいたし、相手に済まない＝源氏に申し訳ない）と思ふに（と思ったが）、御消息も絶えてなし（それ以来は手紙も無かった）。思し（きっと）懲りにける（失敗を慎んでいる）と思ふにも、「やがて（このまま）つれなくて（何事も無しに）止みたまひ（終わりにされて）なましかば（しまえば）憂からまし（君は心残りだろう）。（とはいえ）しひて（強引な）いとほしき（求愛の）御振る舞ひの絶えざらむも（たえざらむも、止まらないのも）うたて（耐え難い）あるべし（ものだ）。よきほどに（是を良い機会に）、かくて（このまま）閉ぢめてむ（仕舞いにしたい）」と思ふものから（と思うものの）、ただならず（落ち着かず）、ながめがちなり（思い沈みがちである）。

君は（源氏は女君を）、心づきなし（意固地に過ぎる）と思しながら、かくては（このままでは）え（とても）止むまじう（終わりに出来ないと）御心にかかり（気に病んで）、人悪ろく（人目悪いほど）思ほしわびて（憔悴されて）、小君に、「いと辛うも（つらうも）、憂れたうも（うれたうも、恨めしくも）おぼゆるに、しひて（無理に）思ひ返せど（終わりにしようと思っても）、心にしも（胸の内には）従はず（収まらず）苦しき（苦しくて）を（しょうがない）。さりぬべき（適当な）をり見て（時を見計らって）、対面すべく（女君と会えるよう）たばかれ（手筈しろ）」と宣ひ亘れば（のたまひわたれば、仰り続けていたので）、（小君は）わづらはしけれど、かかる方にても（この様な事柄ででも）、のたまひまつはすは（御用に召されるのを）、うれしうおぼえけり。

［第二段　源氏、再度、紀伊守邸へ］

（そこで小君は）幼き心地に、いかならむ折と待ちわたるに、紀伊守（が任国の紀伊）国に下りなどして、女どち（どち、同士）のどやかなる（穏やかに暮らす、頃合に）、夕闇の道たどたどしげ（薄暗がり）なる紛れに、わが車（小君の牛車）にて（源氏を）率てたてまつる（お連れ申し上げた）。

（源氏は）この子（小君）も幼きを、（手筈の程は）いかならむと思せど（案じてはみたが）、さのみも（そうとばかり）え（も）思しのどむ（悠長に構えて）まじければ（いられないので）、さりげなき（目立たない）姿にて（服装で）、門など鎖さぬ先にと（紀伊守邸の門が閉じられる前にと）、急ぎおはす（急いで向かわれた）。

（小君は車を）人見ぬ方（通用門）より引き入れて（邸内に引き入れさせて）、（源氏を人目に付かない様に）降ろしたてまつる（車から降ろさせて、寝殿に案内して差し上げた）。童なれば（子供のする事なので）、宿直人などもことに見入れ（気にしたり）追従せず（機嫌取りに出迎えたりもしないので）、心やすし（気が楽だった）。

（小君は源氏を）東の妻戸に（寝殿東面の開き戸の外側濡れ縁に）、立てたてまつりて（お待ち頂いて）、我は南の隅の間より（自分は勝手口にしている南面の隅の間から）、格子叩きののしりて入りぬ（格子を叩いて人を呼び中から開けさせて入った）。御達（ごたち、戸を開けた女房たちは）、

「あらはなり（外から見えてしまう）」と言ふなり（と言っている。小君が）。

「なぞ（なぜ）、かう暑きに、この格子は下ろされたる」と問へば、（御達は）

「昼より、*西の御方の（西殿の御方が）渡らせたまひて（お渡りになって御出でで）、碁打たせたまふ（囲碁をお打ちになって御出でです）」と言ふ。　*正殿寝殿に対して西側にある別棟寝殿に住む伊予介の娘で紀伊守の妹が女君と碁を打つために正殿に来ていた。

（この遣り取りを耳にした源氏は）さて（では其の）向かひゐたらむを（碁盤に向かい合う二人の女を）見ばや（見てみようか）、と思ひて、やをら（そっと）歩み出でて、簾のはさま（すだれの内側）に入りたまひぬ。

この入りつる（先に小君が入った）格子はまだ鎖さねば（ささねば、閉めていないので）、隙見ゆるに（ひまみゆるに、夕日が入って覗けたので）、寄りて西ざまに見通したまへば（近寄って西側を見通し為されると）、この際に立てたる屏風（びゃうぶ、近くの屏風が）、端の方おし畳まれたるに（都合よく折畳まれていて）、紛るべき（目隠しの）几帳なども、暑ければにや（暑いせいで）、うち掛けて（掛け上げてあって）、いと（とても）よく見入れらる（良く見入ることが出来た）。

［第三段　空蝉と軒端荻、碁を打つ］

（二人の女は碁を打つために）火近う灯したり。母屋の中柱に側める（そばめる、此方側に居る）人や（人こそ）わが心かくる（我が意中の人か）と、まづ目とどめたまへば、濃き（紫濃い）綾の（綾

文様の）単衣襲（ひとへがさね、単衣を重ね着した夏服姿）なめり（をしていた）。何にかあらむ（何かの薄衣を）表に着て、頭つき（かしらつき、髪の押さえ）細やかに（細く揃えた）小さき人の（小柄な人で）、ものげなき（物気無き、目立たない）姿ぞしたる（姿ではあった）。顔などは、差し向かひたらむ人（碁の相手）などにも、わざと見ゆまじう（見えないように＝隠し気味に）もてなしたり（謹んで居る）。手つき痩せ痩せにて（痩せ細った感じで）、いたう（常に）ひき隠しためり（袖に引き入れていた）。

いま一人は、東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅（うすもの、絽紗）の単衣襲、二藍（ふたあゐ、紅紺）の小袿だつ（こうちぎだつ、部屋上着程度の）もの、ないがしろに着なして（雑に羽織って）、紅の腰ひき（こしひき、袴の腰紐）結へる際まで胸あらはに、放俗なる（ばうぞくなる、だらしない）もてなしなり（格好だった）。いと白う（色白で）をかしげに（陽気そうで）、つぶつぶと肥えて（ぶくぶく太って）、そぞろかなる（背の高い）人の、頭つき額つき（髪や額が）ものあざやかに（輝いて）、まみ口つき（目元口元）、いと愛敬づき（とても可愛らしく）、はなやかなる容貌なり（派手な顔立ちだった）。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端（さがりば、分け際から）、肩のほど（肩へかけてが）きよげに（綺麗で）、すべて（およそ）いと（まず）ねぢけたるところなく（変な所の無い）、をかしげなる（楽しそうな）人と見えたり。

むべこそ（頷くべき＝納得できる）親の世になく（親が世に無しと自慢するだけの者と）は思ふらめと（感心して）、をかしく見たまふ（興味深く御覧になった）。（ただ其の）心地ぞ（無遠慮そうな気質には）、なほ（もう少し）静かなるけ（気）を添へばやと（慎みがあればと）、ふと見ゆる（ふと思われる）。かどなきにはあるまじ（凡庸でも無さそうだ）。碁打ち果てて、結（けち、囲碁の詰め）さすわたり（勝負の確認のために無効の駄目を数える時に）、心とげに見えて（緊張を解いた様子で）、きはぎはと（其処此処の目を）躁どけば（さうどけば、はしゃいで取ると）、奥の人（相手をした女君）はいと静かにのど（ゆっくり）とめて（押し止めて）、

「待ちたまへや。そこは持（ぢ、あいこ）にこそあらめ。このわたりの劫（こふ、終盤の攻め合いでの目数）をこそ」など言へど、

「いで（いえ）、このたびは負けにけり。隅のところ（隅の数は）、いでいで（どうだろう）」と指をかがめて、「十（とを）、二十（はた）、三十（みそ）、四十（よそ）」などかぞふるさま、伊予の湯桁（いよのゆけた、伊予に多くある温泉の数）もたどたどしかる（覚束なく）まじう（なさそうに）見ゆ（見える）。すこし品おくれたり（品が無いようだ）。

（女君の方は、）たとしへなく（喩え様も無く＝ずっと）口覆ひて（くちおほひて、口を隠していて）、さやかにも（はっきりとは）見せねど（見せないが）、目をしつけ（凝らして）たまへれば（御覧になると）、おのづから（次第に）側目も（横顔が）見ゆ（見えた）。目すこし腫れたる心地して、鼻なども鮮やかなる（あざやかなる、すっきりとした）ところなう（所無く）ねびれて（老け気味で）、にほはしきところも（瑞々しさも）見えず（感じられない）。言ひ立つれば（一々言い立てれば）、悪ろきによれる（悪い部類の）容貌を（顔立ちを）いと（とても）いたう（心得た）もてつけて（身嗜みで）、この勝れる（まされる、地の良い）人よりは心あらむと（奥床しいと）、目とどめ（感心）つべき（するべき）さましたり（姿だった）。

（もう一方の御方は）賑ははしう（にぎははしう、賑やかに）愛敬づき（あいぎゃうづき、愛嬌があって）をかしげなるを（朗らかそうだったが）、いよいよ（ますます）ほこりかに（憂い無く）うちとけて（気を許して）、笑ひなど戯るれば（そぼるれば、はしゃぐので）、にほひ多く見えて（若々しさに溢れて）、さる方に（それなりに）いと（とても）をかしき（魅力的な）人ざまなり（人柄だった）。あはつけし（軽薄な）とは思しながら、まめならぬ御心は（若い源氏の目には）、これも（こちらも）え（なかなか）思し放つまじ（捨て置けなく）かりけり（見えていたようだ）。

（源氏が）見たまふ（今まで見知られた）かぎりの（中での）人は（女たちは）、うちとけたる（姿勢を崩す）世なく（時無く）、ひきつくろひ（其の取り済ました）側めたる（横顔の）うはべを（表面の形）のみこそ（ばかりを）見たまへ（御覧だったが）、かく（こう）うちとけたる（人目を憚らない）人のありさま垣間見（かいまみ、覗き見る）などは、まだ為給はざりつる（したまはざりつる、為さった事が無い）ことなれば、何心もなう（有りの儘を）さやかなるは（すっかり見抜かれるのは）いとほし（気の毒）ながら、久しう（ずっと）見たまは（御覧に）まほしきに（なっていたかったのだが）、小君出で来る心地すれば（小君が縁側へ出てきそうで、覗き見が見つかってしまいそうな気がして）、やをら出でたまひぬ（そっと簾の外に御出に為られた）。

（さらに源氏は気取られまいと、）向かいの渡殿の戸口に寄りゐたまへり。（其の源氏の姿を見て小君は長く御待たせしたままで）いと（とても）かたじけなし（申し訳ない）と思ひて、

「例ならぬ（思わぬ）人はべりて（客人が居て）、え（とても）近うも（姉の近くへ）寄りはべらず（行かれません）」（と詫びたが、源氏が）

「さて（それでは）、今宵もや（今夜もなのか、都合が悪いからと）帰してむとする（帰そうとするわけか）。いと（全く）あさましう（呆れる）、辛うこそ在可経れ（からうこそあべけれ、酷い事之の上ない）」とのたまへば（と仰るので、小君は）、

「などてか（そんなことは、ありません）。（客人が）あなたに帰りはべりなば（彼処へお帰りになれば、たばかり（手筈を）はべりなむ（整えます））と聞こゆ（と申し上げた）。

「さも（そのように）なびかし（事を進めて）つべき（行けそうな）気色にこそは（様子でこそは）あらめ（あるのだろう）。童なれど、ものの心ばへ、人の気色見つべく（みつべく、見図れるほどに）しづまれるを（落ち着いている様だから）」と、思すなりけり（お思いになった）。

碁打ち果てつるにやあらむ（碁を打ち終えたのであろうか）、うちそよめく（人がそわそわと動き出す）心地して（音がして）、人びとあかるる（女房たちが其々分かれて下がって行くような）けはひなどすなり（気配があった）。

「若君（小君のこと）は何処に（いづくに）おはします（おいでで）ならむ（しょうか）。この御格子は鎖してむ（さしてむ、閉めます）」とて（と女房の一人が言って）、鳴らすなり（戸を鳴らした）。

（暫くすると源氏は）「静まりぬなり（静かになったようだ）。入りて、さらば、たばかれ（さぁ部屋に入って、上手く手筈を付けよ）」とのたまふ（と小君に仰った）。

この子も（小君も）、いもうとの御心は（姉の気持ちは）たわむところなく（変わる事無く）まめだちたれば（堅物なので）、言ひあはせむ方なくて（話の着け様は無いので）、人少なならむ折に（人が少なくなった時に、源氏を部屋に）入れたてまつらむと（お容れ申し上げようと）思ふなりけり（考えていた）。

「紀伊守の妹も此方（こなた）にあるか。我にかいま見せさせよ」とのたまへど（と源氏が宣へど）、

「いかでか（いくらなんでも）、さははべらむ（それはむりです）。格子には几帳添へてはべり（戸には目隠し布が立てられていますから）」と聞こゆ（と小君は申し上げる）。

さかし（それはそうだろう）、されども（しかしそれでも）をかしく思せど（源氏は興味深く思ったが、小君には）、「見つとは知らせじ（紀伊守の妹を既に見た事は知らせないでおこう）、いとほし（そうと知らずに算段している小君が可哀想だ）」と思して、夜更くることの（夜が更けるまで待つ事の）心もとなさをのたまふ（遣る瀬無さを仰っていた）。

（小君は、）こたみは（今度は）妻戸を（東の開き戸を）叩きて（叩いて中から開けさせて）入る。皆人びと（女房たちは既に）静まり寝にけり（寝ていた）。

（すると小君は、）「この障子口に、まろは寝たらむ。風吹き通せ（とほせ、風が通って涼しいから）」とて（と言って母屋近くに）、畳広げて臥す。御達（女房たちは其の南側の）、東の廂にいとあまた寝たるべし。戸放ちつる童も（戸を開けてくれた童女も）そなたに入りて臥しぬれば、（小君は）とばかり（しばらく）空寝して（寝たふりをした後で）、灯明かき方に屏風を広げて（廂の間の灯かりを屏風で塞いで）、影ほのかなるに（薄暗くなった所に）、（源氏を）やをら（そっと）入れたてまつる（お入れ申し上げる）。

（源氏は）「いかにぞ（どうだろうか）、をこがましき（愚かしい）こともこそ（事になりはしないだろうか）」と思すに（と心配されたのか）、いと（とても）つつましけれど（気後れしたが）、導くままに（小君が導くままに）、母屋の几帳の帷子（かたびら、垂れ布）引き上げて、いと（ごく）やをら（静かに）入りたまふと（お入りに為ろうと）すれど、皆静まれる夜の、御衣のけはひ（おんぞのけはひ、衣擦れの音）やはらかなるしも、いと（だいぶ）しるかりけり（耳に付いた）。

［第四段　空蝉逃れ、源氏、軒端荻と契る］

女は、さこそ（このように或の日以来）忘れたまふを（源氏が手紙を遣さない事を）うれしきに（心休まる事と）思ひなせど（思い成そうとするが）、あやしく（霊気めく）夢のやうなることを、心に離るる折なき頃（ころ、日々）にて、心とけたる寝だ（いだ、ぐっすり寝る）に寝られずなむ（なむ、ようになって）、昼はながめ（眺め、ぼんやりして）、夜は寝覚めがちなれば、春ならぬ木の芽（この目）も、いとなく（暇無く、休みなく）嘆かしきに（悲嘆していると言うのに）、碁打ちつる君（と来たら）、「今宵は、こなたに」と、今めかしく（今どきの子らしく）うち語らひて（流行り物などのおしゃべりをして）、寝にけり（寝てしまった）。

若き人は、何心なく（屈託なさそうに）いと（とても）よう（良く）まどろみたるべし（眠っているのだろう）。かかる（迫り来る）けはひの（何かを感じた女君は）、いと（とても）香ばしく（高貴な香りが）うち匂ふに（匂い立つので）、顔をもたげたるに、単衣うち掛けたる几帳の隙間に、暗けれど、うち身じろき（誰かが体を）寄るけはひ（寄せる気配が）、いと（はっきりと）しるし（分かった）。あさましくおぼえて（驚いて）、ともかくも思ひ分かれず（何も分からないままに）、やをら起き出でて、生絹（すずし、薄布）なる単衣を一つ着て、すべり出でにけり（御帳台を抜け出した）。

君は入りたまひて（源氏は帳台にお入りに為って）、ただひとり（女が一人きりで）臥したるを（寝ていたので）心やすく思す（之で事に及べると安心した）。床の下に（ゆかのしもに、帳台の浜床下の近い所に）二人ばかり（側仕えの女房が二人ほど）ぞ臥したる（こそ寝ている、ものの、帳台から声を掛けない限り起きて来ないので心配ない）。衣を押しやりて（掛け衣を払いながら）寄りたまへるに、ありし（以前の）けはひ（感触）よりは、ものものしく（大柄に）おぼゆれど（感じるが）、思ほしうも寄らずかし（人違いとまでは思い寄られない）。（それでも）いぎたなき（すっかり寝入っている）さま（様子）などぞ（などはどうにも）、あやしく変はりて（奇妙な変わり様で）、やうやう（ようやく）見あらはし（別人だと御分かりに）たまひて（為られて）、あさましく心やましけれど（驚いて気落ちしたが）、「人違へと（人違いして）たどりて見えむも（まごついていると見られるのも）、をこがましく（愚かしく）、あやしと思ふべし（怪しまれるだろう）、本意の人を尋ね寄らむも（意中の人を訪ねてみても）、かばかり（これほどまでに）逃るる（にぐるる、逃げようとする）心あめれば（気持ちが有る様なので）、かひなう（甲斐無く）、をこ（馬鹿げているもの）にこそ思はめ（おもはめ、思えてならない）」と思す。かの（彼の）をかしかりつる（碁打ちの魅力的な）灯影ならば、いかがはせむに（如何にか遣り遂せると）思しなるも（お考えに為るのも）、悪ろき（卑しい）御心浅さ（浅はかさ）なめり（だったと）かし（いうものでしょう）。

（西の御方は）やうやう目覚めて（やっと目覚めたが）、いと（まるで）おぼえず（思いがけない事態に）あさましきに（驚いて）、あきれたる気色にて（呆気に取られているようで）、何の心深く（あまり深い）いとほしき（恋愛感情を）用意もなし（持っている様子も無い）。世の中を（男女の仲を）まだ思ひ知らぬ程よりは（ほどよりは、であろう割には）、戯ればみたる（さればみたる、遊び慣れている）方にて（態度で）、あえかにも（恥じ入って）思ひまどはず（困る様子も無い）。我とも知らせじと思ほせど（源氏は身を明かそうかとも思われたが）、いかにしてかかることぞと（どうしてこういうことになったかと）、後に思ひめぐらさむも（この御方が後で思い返した時に）、わがためには事にもあらねど（源氏にとっては大した事ではないが）、あのつらき人の（あの冷たい人が）、あながちに名をつつむも（頑なに身を伏せているのも）、さすがにいとほしければ（やはり可哀想に思えるので）、たびたびの御方違へに言付け給ひし（ことつけたまひし、託けて此方を訪ねた）さまを（のは貴女目当てだったと）、いと（なんとか）よう（上手く）言ひなしたまふ（言い包め為された）。たどらむ人は（思慮深い人なら）心得つべけれど（気付くだろうが）、まだ（まだ西の御方は）いと（あまり）若き心地に（経験がなくて）、さこそ（そこそこ）さし過ぎたるやうなれど（物怖じしない様でも）、え（やはり）しも（そこまでは）思ひ分かず（気が廻らない）。

（源氏は西の御方が）憎しとはなけれど（憎い筈も無いが）、御心とまるべき（特に恋慕する）ゆゑもなき心地して（相手でもなく思えて）、なほ（やはり）かの（あの）憂たき（うれたき、憂う気持ちにさせる）人の心を（女君の意固地を）いみじく思す（苦々しく思う）。「いづくに（何処に）はひ紛れ

て(隠れ潜んで)、かたくなしと(私を愚かと)思ひゐたらむ(思っているのだろう)。かく(ここまで)執念き(しふねき、執念深い)人は在り難きものを(ありがたきものを、在ったものではない)」と思すしも(と思われてはみても)、あやにくに(どうしても)、紛れがたう(忘れられず)思ひ出でられたまふ(思い出されてしまわれる)。(それでも)この人の(この西の御方の)、生心無く(なまごころなく、生意気ぶらない)、若やかなるけはひも(若々しい素直な愛され方も)あはれなれば(素晴らしいので)、さすがに情け情けしく(思わず声も口を洩らしながら)契りおかせたまふ(熱い思いをたぎり置かせられました)。

(余熱の中で源氏は)「人知りたることよりも(打算尽くの婚姻よりも)、かやうなるは(このような恋こそ)、あはれも添ふこととなむ(真心も増すものと)、昔人も言ひける(昔の人も言ってあります)。あひ思ひたまへよ(同じ思いで居て下されよ)。つつむこと(慎む事、世間に憚ること)なきにしもあらねば、身ながら心にも(我が身ながら思いのままには)え(とても)任す直否く(まかすまじく、任せられない)なむ(事情が)ありける(あるのです)。また、さるべき人びとも(貴女の父兄も)許されじかしと(許されない事であろうと)、かねて胸いたくなむ(以前から胸を痛めていました)。忘れで(忘れずに)待ちたまへよ(待っていて下されよ)」など、なほなほしく(只の色男口調で)語らひたまふ(姫に語られた。すると姫は、)。

「人の思ひはべらむことの(人が思う事＝人に知られるのが)恥づかしきになむ(恥ずかしいので)、え(まず)聞こえさす(お手紙すら)まじき(差し上げられません)」とうらもなく言ふ(と源氏の寝物語を真に受けて素直に応える)。

(一頻りして源氏は)「なべて(およそ)、人に知らせばこそ(人に知らせたりなど)あらめ(してはいけないが)、この(当家に居る)小さき上人に(童殿上に)伝へて聞こえむ(手紙を遣わせます)。気色なく(けしきなく、顔色を変えずに=普段どおりに)もてなしたまへ(為されて下さい)」

など言ひおきて、かの(憎い女君が)脱ぎすべしたると(脱ぎ残したと)見ゆる(思われる)薄衣を取りて出でたまひぬ(帳台を離れ母屋から出て行かれました)。

小君近う臥したるを起こしたまへば、うしろめたう(小君は首尾が気掛かりに)思ひつつ(思いながら)寝ければ(寝ていたので)、ふと(すぐ)おどろきぬ(飛び起きた。そして源氏の御帰りを察すると、)。戸を(東面の妻戸を)やをら(そっと)押し開くるに、老いたる御達の声にて、

「あれは誰そ(其処に居るのは誰か)」

とおどろおどろしく問ふ(と重々しく問う)。(小君は)わづらはしくて、

「まろぞ」と答ふ。(すると老女は、)

「夜中に、こは(これはまた)、なぞ外歩かせたまふ(なぜ外を歩き為される)」

とさかしがりて(と小賢しく世話焼きぶって)、外ざまへ来(とざまへく、奥から戸口のほうへ出て来そうだった)。いと憎くて(小君は全く面倒なことと思って)、

「あらず(別に、何でもない)。ここもとへ(風を当たりに戸口へ)出づるぞ(出るだけだ)」

とて、君を押し出でたてまつるに、暁近き月、隈なくさし出でて、(老女は戸口に)ふと人の影見えければ、

「またおはするは(もう一人は)、誰そ」と問ふ(と聞いてきたが直ぐ、)。

「*民部の御許(おもと、女房同士の敬称、御方、貴方)なめり(なんでしょう)。けしうはあらぬ(なかなか立派な)おもとの丈だちかな(貴女の背の高さだこと)」　*「民部みんぶ」は徴税局たる民部省勤めの夫か父を持つ女房。

と言ふ(と早合点で自問自答して言う)。丈高き人の常に笑はるる(からかわれる)を言ふなりけり(を言って重ねて軽口を叩いた)。老人(おいびと)、これを連ねて(小君が其の女房と連れ立って)歩きけると思ひて(外へ出るものと思って、小君に)、

「今、ただ今(今に其方も)立ちならびたまひなむ(同じ背丈ほどに大きくなるでしょう)」

と言ふ言ふ(と言いながら)、我も(自分も一緒になって雑談でもする心算なのか)この戸より出でて(来)く(戸口まで出て来た)。わびしければ(厄介なことだが)、えはた(かといって)押し返さで(小君は押し返す事も出来ずにいたが)、渡殿の口に(縁側向こうの渡殿口の高欄に)かい添ひて(源氏はもたれ掛って)隠れ立ちたまへれば(隠れるように立っていらしたが)、この御許(おもと、老女が)さし寄りて(近寄ってきて)、

「おもとは(お前様は)、今宵は、上にや(うへにや、母屋のほうに)さぶらひたまひつる(お勤めでしたか)。(私は)一昨日(おととい)より腹を病みて、いと(一向に)わりなければ(治らないので)、下に(下屋の方で)はべりつるを(休んでいましたが)、人少ななりとて(人手が足りないとの事で)召ししかば(呼び出されたので)、昨夜(よべ)参う上りしかど(参上致しましたが)、なほ(まだ)え(とても)堪ふまじくなむ(我慢できない容態なのです)」

と、憂ふ(辛そうに嘆く。そして)。答へも聞かで、

「あな、腹々(はらはら、お腹が痛い)。今聞こえむ(今は話せない＝また後で)」とて過ぎぬるに(と言って通り過ぎてしまったので)、からうして(やっとの思いで源氏は)出でたまふ(帰途に着かれた)。なほ(やはり)かかる歩きは(このような忍び通いは)軽々しく(危うくて)あやしかりけりと(悪い事なのだと)、いよいよ(以って)思し懲りぬべし(戒めを覚えられた)。

[第五段　源氏、空蝉の脱ぎ捨てた衣を持って帰る]

(源氏は)小君、御車の後(しり)にて(小君を車の後ろに乗せて)、二条院におはしましぬ(二条院に帰られた)。(そして小君に紀伊守邸での)ありさまのたまひて、「幼かりけり(手筈が拙い)」と淡め給ひて(あはめたまひて、窘められて)、かの人(姉君)の心を爪弾きをしつつ恨みたまふ。(小君は源氏が)いとほしうて(気の毒で)、ものも(何も)え聞こえず(申し上げられなかった)。

(源氏は)「いと(ずいぶん)深う(深く)憎みたまふべかめれば(姉君は私を嫌っておられるようなので)、身も憂く思ひ果てぬ(我ながら情けない限りだ)。などか(せめて)、よそにても(逢わないまでも)、なつかしき(親しい)答へばかりは(返事くらいは)したまふまじき(為されても良いだろうに)。伊予介に劣りける身こそ(伊予介に及ばない我が身の程を思い知るばかりだ)」

など、心づきなしと(意に満たぬと)思ひてのたまふ(恨まれる)。(そして寝所で)ありつる(昨夜持ち帰った)小袿を(こうちぎ、女の薄衣を)、さすがに(それでも諦めきれず)、御衣(おんぞ、掛け布)の下に引き入れて、大殿籠もれり(横に為られた)。小君を御前に臥せて、よろづに恨み(あれこれ恨み言を言い立てて)、かつは、語らひたまふ(また、消えぬ恋慕の情を語られた)。

「あこは、らうたけれど(あまえはかわいいけれど)、つらきゆかりにこそ(恨めしい人の弟だから)、え思ひ果つまじけれ(いつまでこうしてもいられないだろう)」

とまめやかにのたまふを(と源氏が真顔で仰るのを、小君は聞いて)、いとわびしと思ひたり(とても心寂しく思ってしおれていた)。

しばしうち休みたまへど(源氏は暫く寝そべっていらしたが)、寝られたまはず(お眠りに為れなかった)。御硯(おんすずり)急ぎ召して、さしはへたる(取り立てての)御文にはあらで、畳紙(たたうがみ、鼻紙)に手習のやうに書きすさび(書き散らし)たまふ(為された)。

「空蝉の身をかへてける木(こ)のもとに、なほ人がらのなつかしきかな」 (和歌 3-1)

「現せ身抜けた空蝉に、移せ実映す有為の打つ背見」(意訳 3-1)

*注釈に<「人柄」に「殻」を掛ける。「木のもと」は「蝉」の縁語。空蝉の人柄を懐かしむ歌である。>とある。「うつせみ」はセミの抜け殻。「うつせみのみ」はセミ本体。「かへてける」は「変ふ(かふ、変える)」の連用形に状態を示す助詞の「て」を付けて客観視したその事柄を、「ける(〜そうなってしまっている)」として過去の事象として認識している、のだろう。意外に分かり難い語用ながらも、この歌は「セミが飛び立った後に幹に残った抜け殻に前の姿が示されるように、この手元に残った女の薄衣にその人が懐かしく偲ばれる」という意外に分かり易い理屈にも見えるものの、やはり「うつせみ」という言葉の多元性に深みがあるらしく、その深みこそがこの歌の味わいかと思う。「うつせみ」は元々は「現身」で「この世に生きるもの」であり、それが世のはかなさを合わせて「空蝉(抜け殻)」に掛けた洒落言葉として使われた、らしい。そこで、意訳はあえて「うつせみ」だらけを試みた。

と書きたまへるを(と源氏がお書きになられた畳紙を、小君は)、懐に引き入れて持たり(もたり、納めた)。(源氏はまた)かの人も(あの西の君の御方も)いかに思ふらむと(どう思っているだろうかと)、いとほしけれど(可哀相な気もしたが)、かたがた思ほしかへして(さまざま考えを廻らせては)、御ことつけもなし(結局無しの飛礫だった)。(そして尚も)かの薄衣は、小袿のいとなつかしき人香(ひとが)に染めるを、身近くならして(お側に置かれて)見ゐたまへり(見ていらした)。

小君、かしこに行きたれば(小君が紀伊守邸に戻ると)、姉君待ちつけて、いみじくのたまふ(厳しくお言いに為る)。

「あさましかりしに(嘆かわしい事であったし)、とかう(何とか)紛らはしても(誤魔化してみても)、人の思ひけむこと(人が思いつく先を)さりどころなきに(定め様も無いので)、いとなむ(全く以って)わりなき(困ったものです)。いと(本当に)かう(このような)心幼きを(未熟な浅はかさを)、かつは(あちらでは、源氏は)いかに思ほすらむ(どう思われているのでしょうか)」

とて、恥づかしめたまふ(小君を恥じ入りさせ為さる)。左右(ひだりみぎ)に苦しう思へど(小君は両方から叱られて辛く思いながらも)、かの(あの源氏の)御手習取り出でたり(いでたり、出して姉君に差し出した)。(姉君は小君の取次ぎを叱ったものの)さすがに、(その御手習を)取りて見たまふ。かの(あの脱ぎ捨てた)もぬけを(小袿を源氏は持ち去ったが、あれを)、いかに(一体どうされたのだろう)、*伊勢をの海人の(いせをのあま、男が脱ぎ捨てた衣が)しほなれて(潮慣れて、潮に浸かる＝漁師暮らしに慣れて)や(のだろうか、田舎臭く思われていないだろうか)、など思ふもただならず(などと思えば気恥ずかしく)、いと(思いはほんに)よろづに乱れて(千々に乱れて…)。　*注釈には＜『源氏釈』は「鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣潮なれたりと人や見るらむ」を引歌として指摘。その歌の詞書には「女のもとに衣を脱ぎ置きて取りに遣はすとて」（後撰集、恋三、七一八、伊尹朝臣）とある。『新大系』は「引歌の歌意により、いかにしてその衣を取り返すか、という気持を下に込める。（中略）衣を取り返すことは源氏との関係が完全に断ち切られることを意味する」と注す。＞とある。どうやら、伊勢の男海人が女の許に衣を脱ぎ捨てて、後で取りに行くという話が下敷きにある、らしい。

西の君も、もの恥づかしき心地して渡り給ひに去り(わたりたまひにけり、自室の西殿に渡殿を通って戻られました)。また知る人もなきことなれば、人知れず打ち眺めて居たり(うちながめてゐたり、ぼんやりとして過ごされた)。小君の渡り歩くにつけても(小君が邸内を行き来するのを目にする度に、源氏からの便りがあるかと)、胸のみ塞がれど、御消息もなし。あさましと(其の源氏の無礼を呆れた所業と)思ひ得る方もなくて(かたもなくて、事も無いほど初心で)、されたる心に(そうした純情なればこそ)、ものあはれなるべし(いっそういじらしい事だった)。

つれなき人も(辛く当たった姉君も)、さこそしづむれ(そうして気を鎮めてはいたが)、いと(決して)あさはかにもあらぬ(通り一遍の遊びではない)御気色を(源氏の御様子を知れば)、ありしながらの(嫁ぐ前の)わが身ならばと、取り返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に(、そっとこう書き添えた)、

「空蝉の羽(は)に置く露の木(こ)隠れて、忍び忍びに濡るる袖かな」(和歌 3-2)

「枯れて乾いた脱け殻を、破る涙に生きる現せ身」(意訳 3-2)

*注釈に＜空蝉が書き添えた古歌。『伊勢集』にある歌とされるが、この和歌の無い写本もあって問題は複雑。『新大系』は「伊勢集に見える古歌だと知られている。とすれば空蝉は古歌をそのまま引用することによってかろうじて返し歌に仕立てたことになる。歌をもって終りとする奇抜な巻末になっている」と注す。＞とある。また、訳文には「空蝉の羽に置く露が木に隠れて見えないように、わたしもひそかに涙で袖を濡らしております」との歌意が説明されている。日陰の女ということだろうか。何だか良く分からないながらも、それなりに意訳を試みる。

(2009 年 1 月 21 日　読了)